

特集

一ツポン研究

日本人はなぜ電車の中で眠るのか「ブリギッテシテガ」「モノ」のお化け 近世の付喪神世界「アダム・カバット

江戸のロンドン「タイモンズクリーチ 拳の研究の意味」セツ・リンハルト

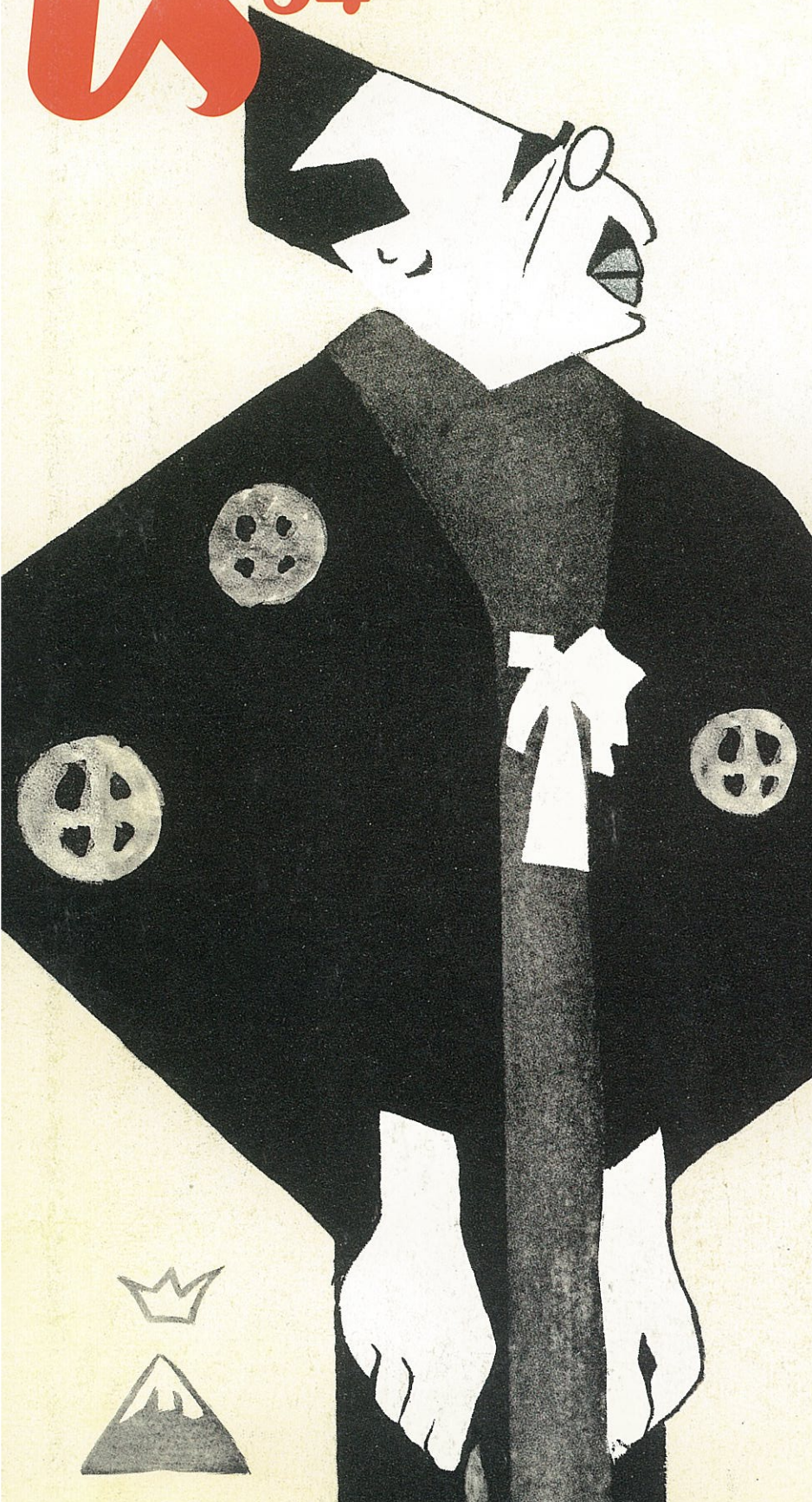
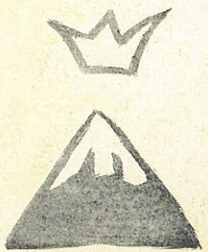
芸者、夜のおとぎ話「ヨーロッパに流布した日本イメージの絵葉書」ペーター・ハンツァー「ちよつと待った!」フランス・ドルヌ

「進め。踊れ。脚。脚。」近代日本脚の起源「オラ・ティズリー」川端文学と日本文化「葉漕渠

漱石研究のすすめ「尹相仁」ロシア文学における日本人像「グリゴリー・チハルチシビリ

温泉文化の発見「19世紀の欧米人旅行者が見た日本の温泉地」マリー・ルイゼ・レーゲラント

【対談】ジャパノロジーの新展開「白幡洋三郎×張競」アンケート「日本との出会い





Geisha, du Märchen
der Nacht-Japan im Spiegel
westlicher Ansichtskarten

二年前、私は日本資料専門家欧州協会(EAJRS)の会長を仰せつかった。荷は重くなつたのだが、やり甲斐のある仕事である。本協会会員の多くは、ヨーロッパ諸国の司書か博物館員で、日本コレクションに携わっている人たちである。その内訳は、美術関係または民族学関係の博物館、昔ながらの古典なり現代の日本書籍を収集する図書館、国立公文書保管所などを中心とした日本関係の文書保存機関、そして資料のコンピュータ情報処理を行なう機関なども当然含まれている。私がこの分野に魅せられるのはなぜだろうか。それは私自身が、若き助手時代、ウィーン大の日本学研究所で長年図書室の責任者を務めていたからである。そして、歴史家としても図書館、公文書館、博物館などの重要性を十分認識しているためである。資料研究なくして歴史の学問は全く不可能である。時折、図書館や博物館の同僚たちを羨ましく思うこ

絵葉書博物館



芸者、夜のおとぎ話

ヨーロッパに流布した
日本イメージの絵葉書

Peter Panzer 近代史

ペーター・パンツァー

とがある。彼らは貴重な金鉱脈が潜む鉱山を支配しているようなものだからである。こうした秘宝を隠すことなく、親切にいろいろ助言も添えながら、我々皆に利用させてくれるのは全くありがたいことだ。

この場でこうした資料すべてを活用する歴史学について述べるのは、私の意図ではない。ただ、歴史にも様々なレベルがあるということとを忘れてはならないのである。例えば、フランス革命を理解するには、王や女王の名前と共に、当時国民のパンやジャガイモに付けられた価格も、重要度の点では全く同じだということなのだ。つまり、江戸時代、諸村の名もなき農民たちがきちんと税金を納めたかどうか、六代目であったか、または七代目であったのかということより、重要性に欠けるとは言えないからである。

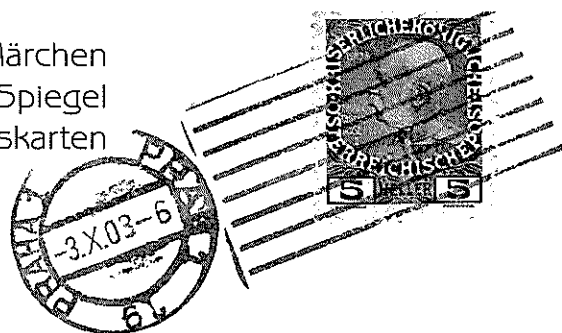
さてここで、歴史家には特定の資料源があるということ段々とおわかりかと思う。その中には幾らでも入手できる物もあるし、非常に入手困難な物もある。理由は様々だが、

あまり意味がないと見なされる物は入手困難である。しかし、歴史は「上」からのみ捉えるものではなく、「下」からも捉えなければならぬ。そういうわけで、伝統的な大型図書館や博物館が今のところまだ収集していない隙間をうめるようなつもりで、私は自分の「資料館」なり「博物館」を創り始めるようになったのである。その一部が絵葉書というわけである。

絵葉書だと？ だいたいは間もなくゴミ箱行きとなる、あの小さなどうでもいいような代物のことか、とお考えであろうか？ まさにその通り。しかし、この手の絵葉書こそ表現力豊かな時代証言であり、時代感覚や見解の理解には驚くほど意味深い資料文献となるのである。西洋で流行して広まり、通信用に利用されたり、あるいは収集品となったりしたこの種の絵葉書を調べることで、ヨーロッパにおける日本に関する観念や見解を探るというわけである。

特集ニッポン研究





遠方へ

遙かなものへの憧れを抱かない人などいないであろう。異國のものを学び、それを見聞したいという想いかられたことのない人もいないであろう。それは自分の井戸端の外に目を向けてみるということである。昔の旅行家たちは、思いつくままに、また故郷の家族などに体験や冒険の様子を伝えるためにも、熱心に日記をつけたり図画帳を持ち歩いたりしたものである。もちろん誰もが図画の名人ではなかったが、絵葉書の発明は何とも打ってつけのものであった。そして絵葉書の歴史こそ、とりもなおさず近代旅行の歴史であり、ますます狭くなりつつある世界の歴史を物語るものとも言える。蒸気船、鉄道、自動車、飛行機が旅行を容易にした十九世紀後半には、ヨーロッパで旅行社やエージェンツの半には、ヨーロッパで旅行社やエージェンツのない町などなかったであろう。全ヨーロッパ人、そしてさらにアメリカ人も、それぞれが旅行者となって山々に遠方の世界漫遊旅行にと繰り出して行った。それでも躊躇する者や、費用や時間のない者には、自宅で絵葉書という手があった。絵葉書を手に想像をふくらますことができるからである。

絵葉書には、今日の世代には想像もつかない意味があった。十九世紀末の頃、緊急連絡などに電話を所有していた者がどれだけいたであろうか。郵便全盛時代で、最高時には日に四回、またそれ以上の配達があったこともある。絵葉書が絵本やラジオ、テレビの代わりをしたわけである。小さな町でも絵葉書屋が必ずあるという風であった。どの家庭にも立派な表紙の絵葉書アルバムなるものがあり、繰り返し皆で眺めたりしたのである。

日本の独文学者、大村仁太郎が、一九〇一年、二年間の留学生活のためベルリンに到着した際の、第一印象のひとつが絵葉書札賀なるものであった。「その殿堂として、ベルリンのあらゆる通りにも沢山の絵葉書屋があ

る。その使用量は二百万枚くらいになるだろうか。そのため、絵葉書の生産だけに携わる特別産業も出現したそうである。手紙を書くかわりにこういう店で絵葉書を買ひ、宛先を書いて自分の消息を知らせるため世界各地へ送るのである。私もまねして利用しようと思えばらしい制度である。別に筆不精だからというわけではないのだが」と、この日本人は驚愕の様子を記している。やはり一八九五年頃生産が始まり、西洋でも入手できた日本製絵葉書が、こちらでどれほど流通し、それが大旅行の見せかけを装っていたか、全く信じ難いことではある。すでに明治初期の頃から、日本美術がヨーロッパに大きな影響を及ぼし始めていたことは周知のことである。特にロンドン、パリなど西欧では早く、それに十年から二十年の遅れで中欧、東欧へと浸透して行った。当時の人たちはもその頃すでに「ジャポニスム」という言葉を使用していた。

日本の絵葉書もこの趣味に入れてよいと思う。それは庶民の絵であった。物見高さを満足させ、しかも安くて、絵に適当なコメントを付けながら、自己の目的に合わせて活用できるものであった。例えばグラーツ（オーストリア第二の大都市）のナントカ嬢は、旅行者たちが箱根街道で籠と共に描かれた日本製絵葉書を受け取った。差し出し人の台詞は、「今、この交通手段がとても良いとお薦めします」というものであった（一八九八年二月二十八日の消印）。また、ポルトン（イギリス）のブラウン嬢は崇拜者より日本茶屋の絵葉書をもらい、彼氏のコメントは、「お茶屋の娘たちと午後のお茶を飲むのは楽しいだろうなんて考えているではありませんか？ いいえ、私は暗い片隅であなたと二人だけのお茶の方が嬉しいです」（一九〇七年七月十八日の消印）であった。

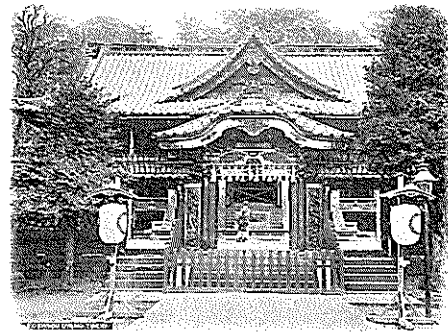
今日、日本人がビデオゲームやカメラの市場を半耳しているように、百年くらい前、日本製の絵葉書が非常にもてはやされていた。日本から発送された数は、普通の郵便葉書と

して使用されたものより、販売用の未使用絵葉書の方が多かったのではないか。ハンブルクへ送られたある野戦郵便用葉書（ロシア発、一九一四年十一月七日付け）にはこうしたためられている。「……夫人へ、このところ葉書不足のため、中国製葉書でお便りしますが悪しからず。当地はこの絵のように麗しくはありません。「中国」と書かれているが、それは日本製で、熊本の本妙寺を描いたものであった。そしてただし書きが添えられ（手書きで）、「これはロシアではありません」とあった。第一次世界大戦の時、ドイツ兵がロシアから日本製絵葉書で便りを書いたなど、誰が想像できるだろう。

シベリアや中国の捕虜収容所に囚われていたドイツ兵やオーストリア兵が故郷へ送った無数の絵葉書は日本の産物であった。日本の業者は市場開発に素早かったとみえる。シベリアに関しては、シベリア出兵で日本から軍隊がこの地に何千人も乗り込み、収容所の監視を受け持っていたという事情もあるが。

捕虜収容所に入れられるなど、誰にとっても嬉しいことではない。しかしそういう体験をして帰還した兵士たちは、遠方に行ったことを吹聴できるのであった。幸か不幸か、これを吹聴する者はどうしたか。世界旅行を偽装するのである。それを助ける抜け目のない業者もいたのである。例えば、東京上野の東照宮などを描いた日本製絵葉書に何か書く。「世界旅行をしています。ご機嫌よう……」という具合である。ウイーン市のケルトナー通り五三番地には「ソサエティー・オブ・ジャパン」という店があり、扇子から着物、お茶道具から絵葉書（もちろん日本製の）までを取り揃えていたが、同店が恐らく何百に達したと思われる客の希望に答へ、通信文が書かれた絵葉書を日本へ送ったのである。日本では姉妹会社がこれを受領し（消印を見ると一九一八年で「横浜一七六番地、モルフ商会」とある）、横浜でそれらを投函したのである。前の日に通りで出会ったたりした差し出し人か

「Society of Japan」
W I E H
Kärnthnerstrasse Nr. 53.



*Empire
Walkways
by
G. G. G.*
Alfred Mayer

162
①「世界旅行」

ら、「世界旅行」の絵葉書を受け取るなど、そのビックリ効果は大きかったであろう。自ら世界旅行したのは絵葉書そのものだったということだ。

鈴木春信(美人画)や安藤広重(風景画)の

花見及び その他 日本の楽しみ

長崎の美しい絵葉書を受け取って喜ばない者がいるだろうか。きつとすぐに送り主の所へ飛んで行くことだろう。幸い国から出なくても、日本を楽しむ方法はあったのである。

二十年ほど前、私がコレクションを始める

絵に「日本からのご挨拶」などと書かれたドイツ印刷の葉書などビックリ仰天もので、P・コレッジと署名があり、「皇太子一九一〇／一年東亜旅行記念」のスタンプがあることから、特別印刷であったと推定できる。私のコレクションにも何枚もあり、別個の差し出し人で宛先が記されているこれらは、事実一九一一年五月に横浜で投函されているものの、ドイツ皇太子の麗しき極東の国訪問など実際にはなかった。少なくとも私の調査したところでは実証されていない。

遠方への憧れと航海とは切り離せないつながりがある。水兵と海洋は、切っても切り離せない存在である。海洋画家の仕事は、母国海軍支援の気持ちを欲呼させる分野でもあった。ヨーロッパ中の大国は皆、勢力誇示や貿易振興のためにも、海外で自国旗を掲げる義務を感じていたのである。とりわけドイツ海軍は「青島」に取りつかれていた。それよりかなり前に香港が英国租借地となったように、青島も一八九八年以降ドイツ領となっていたからである。その頃の絵葉書には、留守を守る故郷の人々が抱く日本像、中国像が非常にうまく表われていておもしろい。彼らにはこの両国の区別がつかなかったのである。一八九七年十一月、ドイツの船団が青島を占領し、早くも翌一月には、この事件をうまく利用した絵葉書が登場している。口髭をたくわえた

水兵が楽しそうに左右に芸者をはべらせる後ろで、二人の中国人が口惜しそうにしている図である(フランクフルトで印刷、一八九八年一月三十日付ケルンの消印、宛先ルクセンブルク)。

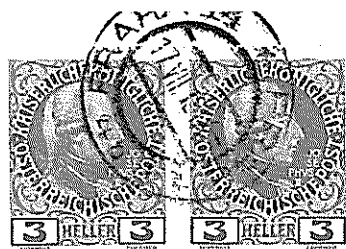
ドイツの有名な海洋画家ウィリー・シュテールヴァー(一八六四～一九三二)の作品をもとに作成された美しい葉書もある。この画家は再三皇帝のお供で外遊をしており、また、度々遠方へ旅行していた。が、東亜だけはまだ行っていないかった。それ故、お決まりの文章に絵の組み合わせである。「中国のドイツ機甲戦隊。町が変われば娘も変わる」との諷刺文句で、日本娘と親密な会話を交している水兵、その背後にはドイツ艦隊を描いている。中国で芸者とは？ やはり義和団の乱鎮圧のため、中国に対し討伐部隊を派遣していた日本軍隊だが、味方ドイツ人に魅力的な芸者を提供したとも考えられない。

オーストリア人水兵が長崎で投函した色彩豊かな絵葉書もまやかしである(一九〇〇年九月二十五日の消印で一九〇〇年十一月四日、ウィーンに到着)。本物の日本美人が描かれ(中国女性ということもありうるではないか)、次のような挨拶文がつく。「私のことを思い出してください。この日本美人の葉書を送ります。お暇があれば、どうぞすぐいらして下さい。お気に召すことでしょう。」

わで飾りたてた静かな片隅で、音聲をおさえた音楽を聴きながら美人と席を共にするのだ。これらから日本に想いを馳せたのだろうか。

この店だけに限らない。ウィーン七区にも「メゾン・ジャポネーズ」という店があった。その宣伝文によれば、室内庭園と岩風呂のある「優雅お休み処」ということだった(一九〇二年一月三十日の消印付き絵葉書)。今日なお、「芸者バー」なるものがウィーンにはある。しかしそのメニューは寿司ではなく、個室と

Geisha, du Märchen der Nacht-Japan im Spiegel westlicher Ansichtskarten



チャールミングなお相手付きで明け方五時まで営業というものである。ところで学生に、このような場所での日本研修を薦める教師はいないであろうが。

十九世紀、パリ、ロンドン、ウィーンといった大都市のみ日本風茶屋があったのだとは思えない。その証明として、他の都市名もあげることができるからである。しかし、ここではボヘミア(今日のチェコ)の小都市カールスバートの名を出すのみに止めておこう。彼の地では、すでに一八八五年、ある磁器工場経営者が日本パビリオンなる物を造り、それは無数の絵葉書に描かれている。この施設は何十年間にもわたり、客を楽しませてくれたのであった。とはいえ、こうした日本風茶屋の中でも最も華麗であったのは、長年プラハに存在した店であろう。本来は一九〇八年、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフの戴冠六十年を記念した大産業博覧会の会場に建設されたものであったが、その終了後、そのまま市内に移されたのであった。そして本格的イメージを出すため、「実物」日本人も二人取り揃えたのである。多くの客を喜ばせようと、芸者の魅惑も忘れてはいなかった。ただし日本生まれではなく、ボヘミア生まれの芸者ではあったが。絵葉書が存在しなかったら、これを知る由もなかったろう。

またこの年代に催されたお花見会についても、絵葉書なしでは想像し難かったことだろう。それは、絵葉書製造者たちの商人的閃きと直感を働かせた人気事業であった。桜の花見だの、藤見だの、観菊といった祭行事のようは、今日に至ってもこうした無数の美しい絵葉書から窺い知ることが出来る。それらは小型絵といえども手間暇かけた豪華な仕上げで、詳しく論じるに値するものである。

特に人気を博したのは、言うまでもなく、一九〇一年にプラター公園で開催された大桜祭で、それは三日間も続いたものであった。「日本式お花見大会、於万博館、一九〇一年五月十八、十九、二十日」と印刷され、「メッ

テルニツヒ侯爵夫人主催」となっている。この祭を描いた私のコレクションの絵葉書一枚に、その女性差し出し人が、「小さな日本娘よりご機嫌よう(ウィーン発ワイウメ宛、一九〇一年五月十日の消印)と記されたものがあるが、なかなかよい感覚だと思ふ。この行事で恐らく最初に日本衣装を付けた女性かと思われるのは、決して小さからざるメッテルニツヒ侯爵夫人。彼女はウィーンの「会議は踊る」で有名になったかの宰相の孫娘であった。当時のウィーンで、彼女は少なくともこの有名な祖父と肩を並べるくらい、名が知られた存在であった。ただし政治的にはなく、ウィーンの社交界においてであったが。

ウィーン一流日刊新聞「ノイエ・フライエ・プレッセ」が、何枚もの紙面を割き、四日連続でこの様子を記事にして載せている。これは当時の人々が楽しみとか余暇のためにどれほど時間をかけたかということだ。「万博館の桜花見大会」と題して次のような記事がある。「明日の土曜日、ウィーン市民は、万博館でパウリーネ・メッテルニツヒ侯爵夫人主催の日本風大桜祭を体験する。春の色彩を陽の光の中に埋めようと、華奢な桜の花が音もなく花開く時、日本では習わしとなっているように、きつと大掛かりな桜祭になるであろう。……数日後には、広場におとぎ話のような美しい日本の町が誕生するのだ。……御殿やパビリオンがいくつも並び、至る所、桜の花に埋もれている。桜並木が通る小庭園があり、カフェ、レストランが見える。気のきいた小さな売店もあり、明日は愛らしい女性たちが各種飲み物を売るのだらう。さらに日本風茶屋、扇のパビリオン、仏塔、居酒屋、芝居小屋等々……」

翌日の新聞が報じたところでは、「桜祭第一日目の今日は、大成功のうちに終わった。午後二時より何千人もの見物客がプラター公園へ繰り出し、そこへ向かう市電は満員で、無数の馬車が緑の野原を突っ走り、郊外電車も大勢の客を運んできて、早くも開場三十分

後には異様な賑わいを見せていた。かわいらしいパビリオンのまわりは、色彩豊かな見世物で沸き立っていた。それはあたかも日本という魔法の町に紛れ込んだかのようであった。接待役の女性たちは競ってサービスをし、かいがいしく動き回った。彼女たちは皆日本の着物を着ていて愛らしい……この町の最高の魅力のひとつが日本公使夫人、ミネ・デ・マキノのパビリオンであった。公使夫人はとても美しい着姿で、非常にチャールミングに英語で会話していた」ということである。彼女のパビリオンには墨田川からとった「スミダ」という名がつけられていて、彼女は何枚もの絵葉書に日本語で「すみだ」と毛筆サインをしている。

日曜日には五万人以上の客がこの祭に押しかけたので、入場券売り場を閉めようかと考えたくらいであった。新聞の記事によれば、「日曜日の客は、とりわけ絵葉書買い争いに熱中していた。あちこちの通りに繰り出し、自分たちの絵葉書を見せびらかそうとした若い女性たちの数が、第一目より多かつたという事情もあつた。」メッテルニツヒ侯爵夫人のパビリオンは「藤の家」といい、彼女自らも絵葉書を売っていた。絵葉書はくじ付きで売られたこともあつて、人気も増したのである。

侯爵夫人のアイデアは尽きることがなかった。例えば一九〇七年一月、日本風舞踏会の招待状を出したこともあつた。この時も新聞各紙は熱を入れて報道した。「会場に入るや否や、身を切る寒い冬の夜から、言い尽くし難い異国情緒を漂わす温暖な地帯に入ってしまうようである。一見、ラフカディオ・ハーンが述べたこの国への賛辞が、突然目の前に現われたかのように思えてしまう。九時半にもなると、魅力的な芸者や日本娘の扮装をした者で会場はすっかり埋まり、早くも正式開会式の前に仮装舞踏会の雰囲気はすっかり盛り上がりつつあった。町服姿の紳士たちは皆背広の襟に桜の花をつけ、軍人たちは軍服に小型日本国旗をつけていた。「日本万歳」が合言



5

- ① 「ドイツ皇太子東亜旅行記念」
- ② ヴィリーシニア・ヴァー作
- ③ 「町が変われば娘も変わる」
- ④ 「オールナイト・コーヒハウス・シヤパン」
(二八九九年頃、ウイーン)
- ⑤ 「日本茶屋」(一九〇八年、プラハ)
- ⑥ 「日本茶屋 横浜」(一九一〇年頃、プラハ)



Gruß aus Japan!



6



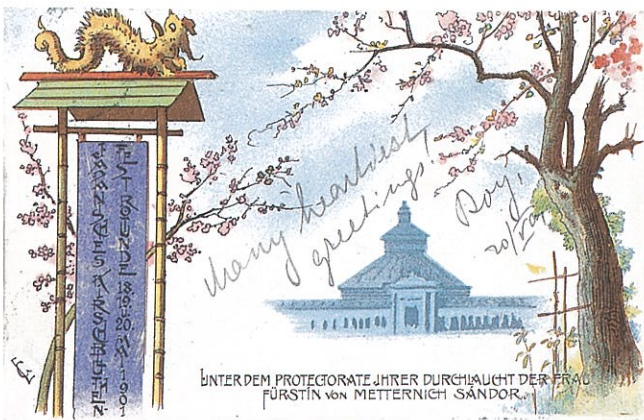
3



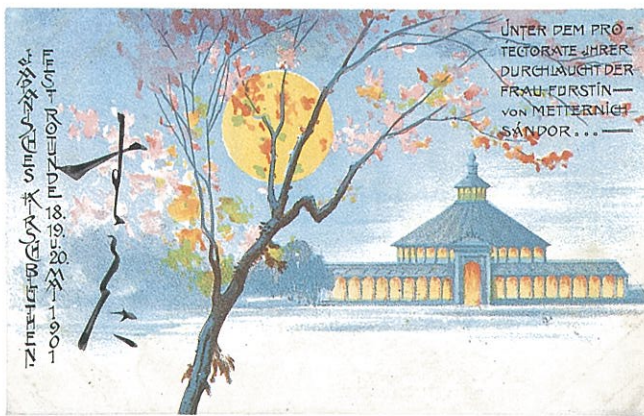
7



4



8 プラター公園、大桜祭 (ワイン)



9



10



11

9 「牧野公使夫人の『黒田』」
10・11 「日本風花見大会」
(一九一三年、ワイン)

葉となつて、美しい芸者や日本娘たちも殿方すべてを熱狂的な日本ファンにしてしまおうと、疲れを知らぬほど一生懸命になつたのであった。会場入り口には、もちろんお決まりの絵葉書売り場があつた。

の市立公園で催された「日本風花見大会」においても、絵葉書の売れ行きは大変なものであつた。毎度のことながら、売り上げが福祉事業に寄付されたこの行事の主催者は、特に位の高い人物であつた。主催者委員会のトップは、何を隠そうツイタ大公妃、のちの皇后と

なる人だったのである。そして絵葉書売り場も、「日本風茶屋」「東京の幸運の港」「日本の金魚釣り」などに劣らず重要な売り場であつた。絵葉書売りの女性たちは、自ら絵葉書のモデルとなつていて、魅力的な芸者姿で男性たちを日本ファンにさせていたのである。

芸者、夜のおとぎ話、 天下太平と日本

「日本女性は皆華奢で子供のようだ。切れ長の目をした和やかな顔が常に輝いている。そして丁寧な結い上げた炭の如く真っ黒な髪に差した簪もキラキラと輝く……暗い顔はどこにも見られない。心の中はどうあれ常に明るい顔を見せるよう、子供の頃から躰られていくからである。」一八九〇年代、青少年向けに

女流作家が書いたシュトゥットガルト出版のドイツの本にはそう書かれている。この種の本は十九世紀の終わり頃から沢山出ており、読み易く小説のような形式によつても広く出回つていた。

まさにこうしたわけで、絵葉書画家たちも描写をあれこれ競い合い、上記のような詩人や作家たちの文章を補助絵を提供したのである。三味線を持った芸者、お茶を給仕する芸者、芸者と人形、恋文を読む芸者、日傘を持つ芸者、扇子の隙間からそつと貞淑にのぞく

芸者、富士山を背景に芸者と水蓮といった具合である。鳩に餌をやる芸者があつたり、その鳩の代わりにオウムであつたり、金魚、リス、小猫などが登場したりもした。これらは特別のきっかけがあつて生産されたわけではなく、連続生産され印刷年月日が入られることは稀であつたため、なかなかその年代をつきとめることができない。郵便の消印がはっきりと解読可能に残っていれば、それが唯一解明の助けとなる。製造業者をつきとめる手がかりもあまり記されていないことが多



15



14



Ich die mit dem Morgen um 11 Uhr
 2 1/2 in die Hand auf dem Weg zum
 Meise

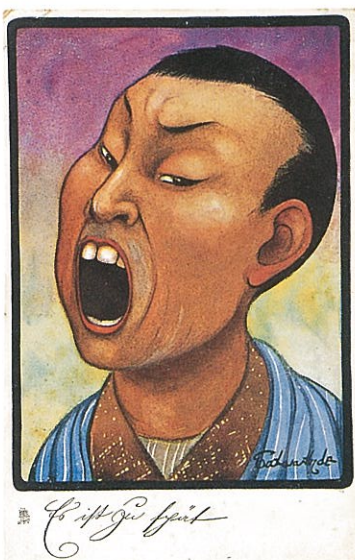
12



16



13



18



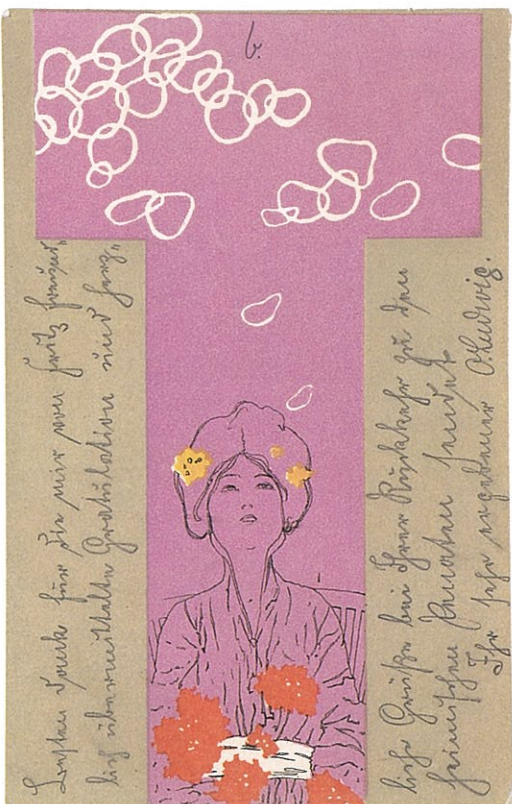
17

い。一字もないか、あるいは略名(特に西欧では)であることが多いのだ。出版社及び印刷地が明記されている葉書の大部分はドイツ製である。
 これに対し、技術面では非常に手間暇かけ

て製造されていることが多い。一八八〇年代には白黒であったのが、九〇年代半ば以降しだいに色が増えていっている。ほとんどすべてがリトグラフィー技法を用いている。さらに光に透かして見ると、着物なり提灯なりが

見えるという葉書もある。あるいは折り畳み式に人物が飛び出すような形式の物。凸版印刷の物。薄い木の皮でできた物、芸者の着物に全く本物と見まがうほどの小粒真珠を貼りつけたものなどが挙げられる。

12~16 「芸者、夜のおとぎ話……」(イギリス・ドイツ)
 17、18 「タック社の日本男性」(ロンドン)



19



19



22



20



Geisha, du Märchen
der Nacht-Japan im Spiegel
westlicher Ansichtskarten

26



Fröhliche Ostern!

Mit Grüßen
v. Papa

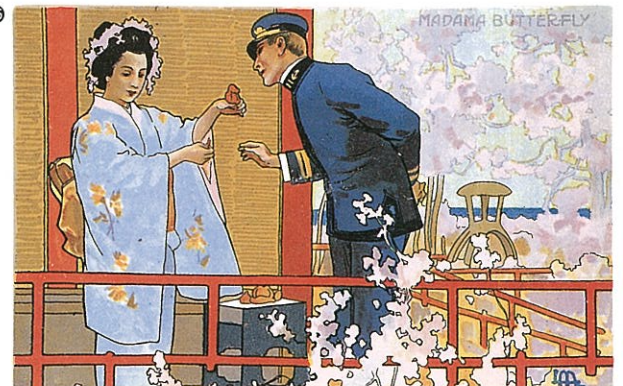
23



24



25



- 23 マスカルのオペラアイリス(イタリア)
- 24 フッチーの「蝶々夫人」(イタリア)
- 25 「イースターおめでとう」(ドイツ)

Geisha, du Märchen der Nacht-Japan im Spiegel westlicher Ansichtskarten



私がコレクションを始めた最初からびっくりにしたのは、西洋社会がもっぱら女性を通して日本への想いを呼び起こしていたことだった。男性という日本人の半分は隠されて、黙殺され、差別されてしまったのだ。そして日本男性のために力を貸した社会学者は一人もいなかったのである。

ただ、グラハム・ハイドを使っていたロンドン人のラファエル・タック社だけは、日本男性の名譽挽回にいくらか寄与したようである。六枚シリーズで男性像だけの物を出しているからである。添え書きは販売される国により英語、仏語、独語と使い分け、モデルの表情により「非常に驚いている」「とてもそうとは思えない」「間に合わない」「よくわかってる」「嬉しい」「喜ばしいことである」、などとなっていた。

なぜ日本男性は登場しなかったのだろうか。または、日本男性を登場させたくなかったのはなぜか、と言った方がよいだろうか。明治時代、日本への旅行者のうち十人中九人は男性であった。各国の商船団や軍艦の乗組員は当然ながらすべて男性であった。彼等が美しい異性に関心を向けるのも、日本の同性をライバルとして羨望のまなざしで見なかったのも納得がいくことである。それはビエール・ロティの著書、出版と同時にベストセラーとなった『マダム・クリサンテーム』(お

善玉英雄と 悪玉英雄、 戦争と日本

ヨーロッパにおける好意的な日本像は、一九〇〇年から一九〇一年にかけての中国義和團の乱にも特に損なわれることはなかった。日本は同盟国として、他の西洋諸国と力を合わせるべく中国に駐屯していた。日本人は――

菊さん)を思い起こせばわかることである。

一方、西欧の婦人たちについて言えば、彼女たちは日本娘の華麗な着物に魅了されたのだった。そうとなれば日本男性としても、自国の女性たちがより麗しくより華やかな着物を着ても全く文句はないだろう。美しく、または優しく、これ以上望むことがあるだろうか。そして西洋では、この代名詞は昔から芸者ということになっていた。たいいての芸者は機知に豊み、芸術的にも才能があったことを皆知っていたからである。また彼女らのまわりには、ある種のエロチックな魔力も漂っていた。このテーマで新しいヴァリエーションを次々に考案し、無数に大量生産された絵葉書だが、ひどく甘ったるい俗物になることもあれば、驚くほどの芸術性が潜んでいることもある。有名なアール・ヌーボー画家製作の絵葉書などは、今日収集家たちが珍重する類のものである。ギルバート&サリバン作の英国オペレッタ『芸者』や『ミカド』、マスカーニのオペラ『アイリス』、そしてもちろんプッチーニの『蝶々夫人』なども、日本テーマで絵葉書を製作する際、大体は六枚か十二枚組であった、芸術家たちの想像力をふくらませてくれたのであった。この手の絵葉書では、オーストリアやイタリアで最高のものが生まれた。

ところで、皆これらの絵葉書をどう活用し



⑦「中国、義和團の乱」(フランス)

たのであろうか。もちろん集めて通信用に使うのである。自分の居住地付近の名所絵葉書ばかり送るのにも、しだいに飽きてきた。新年、イースター、クリスマス用にはお決まりのものがあつた。しかし年中クリスマスやイースターではないから、その合間にはまた違った種類のものが要るのである。例えば「葉書ありがとう。休み何してたの? 天気悪いね。また葉書ちょうだい。ご両親によろしく」など要件を伝えるため、今日の携帯電話ブームと競うように、百年前は葉書で送られたのであつた……(一九〇二年、ドイツに巡回)。そういうわけで、可愛らしい日本娘がイースターの葉書を飾ることになつても、ちつともおかしいことはなかったのだ(「イースターおめでとう! 父より」と書かれ、ライプツィヒ社印刷で、一九〇二年、オーストリアに巡回)。

また西洋の女性たちが好んで芸者の扮装をしたことについても、全く不思議はない。花見や観菊会に登場した芸者姿にはすでにお目にかかっている。日本の着物を着ると、オーストリア人オベレッタ作曲家ロベルト・シュトルツが、彼女らの夢見る極東の魅力を音楽で飾り立てるかの如く、特別に流行歌「芸者よ、夜のおとき話」(ウィーン、一九二〇年作曲、作品番号三六九)を作曲したそれを感じてしまうからであつた。

芸者は軍服を着ることができないから、ここでは当然男性をさして言う――当時の絵葉書ではほとんどが漫画像として描かれている。例えばベルギー製のを見ると、「中国での戦争。執行吏としての日本。『ああ、債権者がやって来る。返済できないならトランクから降りろ』」(一九〇〇年十月三日の消印)。

また一九〇四/〇五年の日露戦争は予期せずして注目を浴びることになった。それは単に花火というに止まらず、大きな事件となつ



30



31



32



28



29

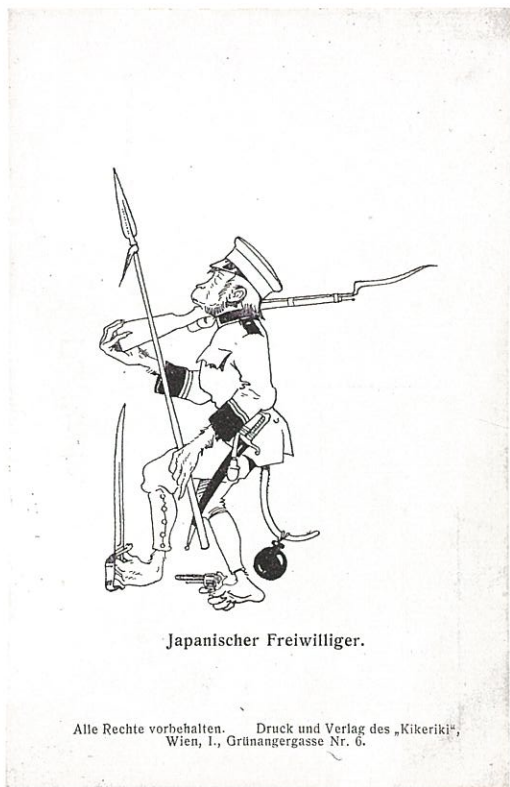
たのである。いずれにせよ、野次馬根性から始まって時と共に緊迫感が増し、さらにはアソコルが叫ばれるほど西洋では大喝采を浴びせたのであった。「黄色い危機」なるスローガンもすでに生まれていた。ロシアはまだ古い価値観に固執し、出兵を散歩のように考えていた西洋のキリスト教勢力であった。日本

は旧約聖書、歴史書に出てくるフィリステ軍の巨漢ゴリアテを少年ダビデが討ち取ったような立場として、これまで負け犬ではと考えられていたが、日本が勝利を収めるたびに、とりわけ反皇帝派（ヨーロッパの社会主義者たち）のサークルやハンガリー（十九世紀には極めて反ロシア的であった）において大歓迎

されるようになったのである。ウィーンでの方が、戦場より戦争についてよくわかるのだ、とある新聞が報じている。それに貢献するのは新聞だけではなかった。芝居もこれに力を貸したのである。あるウィーンの劇場では、「旅順港」をレパートリーに入れて百回も上演したが、切符売り出しと開演の前には、必ず

28 日露戦争 29 ドイツ
30 イギリス 31 スウェーデン 32 フランス

- 33 [第一次世界大戦 日本外交官、略奪を考えながら……(ドイツ)]
- 34 [第一次世界大戦 黄泥棒(ドイツ)]
- 35 [第一次世界大戦 日本の兵隊(オーストリア)]
- 36 [第一次世界大戦 悪党第七号(ドイツ)]





Geisha, du Märchen der Nacht-Japan im Spiegel westlicher Ansichtskarten

それを知らせる小白砲の合図の音が鳴ったものである。そして戦争を肯定的に捉えるのに寄与したものには絵葉書も含まれていた。

戦争をイラスト化し説明文を付けた西洋製絵葉書は多数あった。大がかりな戦さから戦闘や小ぜりあいに至るまで、陸上の戦いも海戦も、あらゆる戦いのようが伝えられた。ロシアが多くの絵葉書を生産したのは自明のことである。しかし、他のヨーロッパ諸国もこれに負けじとその生産に精を出したので、トルコにおいてまで日露戦争を描いた絵葉書が存在するくらいである。そうした葉書から、天皇も含む日本のあらゆる有名政治家を知ることができたのだった(英国製、ドイツ製などで「日本の有名人」などという優れたシリーズがある)。また、戦争の状況を知るためには地図シリーズまで登場し、各社が競って製作したほどである。

それは当時最新の武器を使用した戦争で、敵しいものであったが、ある意味では代理戦争のようなものでもあった。名高いオーストリア人画家ルートヴィヒ・コッホ(一八六六―一九三四)が描いた、競馬場の馬車二台にこれが表われている。そのタイトルは「満州賞を争う競馬、日本対ロシア」。小柄な日本人がイギリス人の膝に座り、ロシア人はそれより身体も大きく、その馬車を引く馬もより力がありそうで、背後のフランを持つたフランス人の援護を受けている。そして他の大国がこれを眺めている、という図である(一九〇四年七月二十八日、リンツの消印)。なかなか和やかな微笑ましい描写である。漫画化して表現することが多かったにもかかわらず、他の会社はもつと露骨に見せていた。スウェーデン製の絵葉書では、日本兵とロシア兵の決闘場面が描かれ、フランス製のものでは、日本兵が敵のロシア兵をそのまま呑み込んで

足だけ見えている、という風である。

一九一四年になると、ただ傍観するだけではなくなつた。誰もが事件の渦に巻き込まれてしまった。誰が欲したことでもなかつたが、皆がそれを引き起こしたようなものだった。世界は二つの同盟のどちらかに分かれた。第一次世界大戦の絵葉書もその戦争騒動を反映し、味方と敵方では非常に対照的に描かれたのだった。日本は一九〇二年に英国と同盟を結んでいたため、ドイツやオーストリア・ハンガリーにとつては敵国となつたからである。その結果、中国におけるドイツの租借地青島も、数か月後には日本の手中に落ちることとなつてしまった。

そのため、中欧諸国においては日本に対し明らかに否定的報道が目立つようになつた。自らのモラルを飾り立て、敵側のそれをけなすべく、悪意がこもつて手厳しい、時には趣味ストレスという所まで落ちた物まで登場するようになったのである。絵葉書作家たちは、当然ながら自国の兵士たちを英雄に仕立てた。「我らは青島を死守する」として、ドイツ・オーストリアの兵士たちが、勇敢に何事にも動ぜぬ姿で、日本海軍が押し寄せて来る海上に一瞥をくれる様が描かれていたりする。逆に敵の利益など話題にもならない。例えば、冷笑をたたえたヒョロヒョロの日本人外交官が、青島略奪を考えながらもみ手している図など。日本の悪宣伝をするドイツ・オーストリア製絵葉書の中でも、これはまだ礼をわきまえている方の部類に属する。日本人の性格描写としては、常に抜け目なさで残忍さが挙げられる(「黄泥棒」。英国の希望にへいこらして従つたということから、猿に格下げされたこともある)。

これらの絵葉書は、戦争勃発の一九一四年夏から一九一五年半ばにかけて、大体一年以

内に発行されている。当初需要は満たされていた。それが一九一六年半ば頃より、ドイツ政府及びドイツ軍司令部の強い要望で、日本に対するあらゆる悪宣伝は停止された。また日本との特別和平が危ぶまれないよう、黄色い危険論を唱えた皇帝にもストップがかつた。しかし、これらが全く役に立たなかつたことは周知の事実である。この戦争が諸民族の凄まじい戦いとなるなど、一体誰が予期し得たであろうか。こうして日本は最後まで敵として悪党のままであった(詳しくは「悪党第七号」である。ドイツにはあと六国の敵がいたからである)。では味方の側はどうであつたか。彼等も戦時中絵葉書を製作していた。すぐに察しがつくことであるが、こちらの絵葉書は日本に好意的であつた。「信用できる同盟者よりご挨拶」と、英国製葉書は日本人を描き、「青島攻撃の日本軍」と、一九一五年発行のフランス製葉書は、日本人を善良かつ英雄的朋友として描いている。

しかし政治情勢は急変するのが世の常であり、それと共に絵葉書に登場するモチーフも変化するのである。三〇年代の日本では軍隊が政治を形成しており、日本も陣営を変えたのであつた。民族同盟退はナチ・ドイツへの接近を意味し、最終的には反コミンテルンから三国同盟へとつながつたのである。こうしてドイツ側には極東の強い英雄がつくことになつた。黄色い猿というモチーフは、たつた二十年で消え去つてしまひ、勇ましい無敵の侍がすべてを支配するようになったわけである。イタリアのファシズム政党が発行した野戦郵便葉書がそれを完璧に物語っている。日本、ドイツ、イタリアの三国旗の前で、日本の同胞が英国艦隊全滅の援護をしている図である。



37 「第一次世界大戦 信用できる同盟者よりご挨拶」(イギリス)
 38 「第一次世界大戦 青島攻撃の日本軍」(フランス)
 39 「三国同盟」(イタリヤ)



空想と現実の狭間で

西洋で製作された何百という日本に関する絵葉書の中から、最も典型的なものを選び出すのは非常に難しいことであった。本当にそれにふさわしいものはどれか。これはまた非常に主観的な好みの問題でもある。時には記録・ドキュメンタリーとしての価値が、芸術性よりも優先され重要となることもあるが、選択にはできる限り俗物を避けるような心がけられた。日本製絵葉書の輸入品から、その西洋での大量販売、日本心酔の西洋製絵葉書の誕生と収集までの道は幾層にも積み重なっている。そして、ヨーロッパでこれらすべてが広く普及していたことは、郵便の消印が証明するところである。

絵葉書はその時代のすばらしき証人である。オーストリアもこれに寄与しているわけ

だが、絵葉書というものは全く画期的な発明であった。一八七一年、ある新聞の風刺欄に当時最も人気のある評論家の一人が、近代政治機関視察のために、ヨーロッパ旅行を計画しているという、帝の親類に宛てて架空の手紙を書いたことがあった。その内容はだいたい次のようなものであった。「突然に失礼申し上げます。この度は欧州の諸機関をご視察のため、オーストリアにご滞在中と承りました。僭越ながら申し上げますと、当地ではあまりお役に立たないのではないかと存じます。当地には大した物はなく、気の効いた物はすべて外国製だからでございます。ただ一つオーストリアの発明品と誇れますのは、三十年戦争以来存在致します、ニクロイツェルの通信葉書なる代物でございます。国民は互いにこの葉書を送り合い、互いに嫌味の送り合いをしますのでございます。……」

通信葉書というアイデアは、一八六五年「開封郵便」なる発案を出して、ドイツの郵便

専門家ハインリッヒ・フォン・シュネーが初めて紹介したものであった。これが実践に移されたのは、若いオーストリア人経済学者エマヌエル・ヘルマンによつてであった。オーストリア郵政局はヘルマンの理論に感激し、一八六九年十月一日付で、世界初の郵便葉書を窓口で売り出したのである。この思いつきは大当たりであった。葉書の書き手は、書簡につきものの美辞麗句を省いて、重要事項のみを優先してしたためることができ、料金の安さでさらに書く気が起るということが、にもなり、郵政局は気が遠くなるほどの収益をあげた(通常、国営機関ではこのようなことは滅多にあることではない)。文房具屋は便箋、封筒の売り上げ減少に慌てたが、そのうち葉書に絵を添えることを思いついた出版社が現われるに至り、両者共満足したわけである。そして第三に満足した者は収集家であった。

絵葉書第一号の栄誉をめぐっては何か国が争っているものの、確かなのは、九〇年代初め



Geisha, du Märchen
der Nacht-Japan im Spiegel
westlicher Ansichtskarten



Here's an irresistible cup of tea.



40

にはこのブームがすっかり広まり、以降一九二〇年代までずっと続いたことであった。日本に関しては、他との関連において知られていることが確認されていると断言できる。すなわち現実と想像力が歩調を合わせることはないということだ。日本はエキゾチックな恋愛物語の舞台として完璧であり、美しいものに関しても楽園のようであった。それが土着の平凡さや既成のモラルを振り切つて、何か新しくより良いものを発見しようとしたヨーロッパ人の希望にぴったり合ったのである。しかし、ヨーロッパ人は日本に対して常に教師の立場であり、日本人は逆に生徒の立場にあると見なしていたため、その日本が世界情勢の中に競争者として現われ、ロシア軍から勝利を勝ち取るなどということになつて、全く唾然としたのである。日本は瀬戸物の花瓶のように壊れ易いものではなかったかと。ヨーロッパ人は何か騙されたような気になり、この誤つた考えを修正し、日本は信用できない、非合理的な、正体の掴めない、ずるいという正反対のイメージを抱くようになり、昔ながらのオリエンタに対する歴史的恐怖感をあからさまにしたのであった。この状況の急速な方向転換ぶりは、絵葉書の図柄に

も非常に明確に表われている。日露戦争勃発までは、私の記録にも微笑ましい日本像が圧倒的で、中国義和団の乱における日本の役割も小さな雲の如きものであったが、やがて芸者、桜、藤などを照らす太陽に吸い取られてしまつていった。日露戦争の際、ロシアの悲劇的結末が想像し難いうちは、絵葉書作者たちも明るいテーマばかりを扱っていたが、愛敬のある日本像や微笑ましい日本像がすぐわなくなつてくると、少なくとも滑稽な日本像という風にテーマを変えていった。第一次世界大戦が「穏やかな」世界に侵入し、芸者製品(女性)が突然黄色い悪党製品(男性)に道を空けねばならなくなるまでは、好んでお菊夫人や蝶々夫人の世界に戻つていった。しかし胸に手をあてて考えてみると、我々のうちで、今日なお十九世紀にでき上がった観念にとらわれていないという者が実際にいるだろうか。ここではほんとうの日本像を捉えることを重要とするのではない。ある特定の物は、単に好みに添うよう評価されてしまったということなのだ。我々の絵葉書作家たちは、いかに大胆に日本の美女たちを描くすべを心得ていたか。心を惹き付ける胸元、思いつき大きく開けた着物の胸元である。日

41

本の着付より刺激的でくだけている。絵本に出てくるようなウィーン女性、ベルリン女性、パリ女性たちも、「かいがいしきや優しさ」を競い、絵本のような日本女性と一体になっていた。英国紳士が夢見たのと同様に「断れないお茶」、一九一〇年頃、ドイツ水兵も新年の葉書に描かれる美しい着物姿の女性に相手にされたいと願つていた(一九〇四年に出回る)。絵葉書使用者にとつて何が現実で、何が想像であったのか。絵葉書はその時代の産物で、急ぎの日常必需品であつて、永続性を考えて作られたものではなかった。一言で言えば、当時の人々の考えていた日常の様子をここにはつきり見い出せるということだ。それが故に、これら小さく安価な印刷絵は、過ぎ去つた年月の上に現われる様々な複写図、戯画、理想図などを、苦勞なく示してくれるのである。様々な例に見たように、絵葉書は非常に敏感に政治や理念の変化に対応するもので、ある文化圏の他の文化圏に対する概念——それが正しいか誤りであるかは別として——を覗くのに最も正直な手段であると

40 「断れないお茶」(一九一〇年頃、イギリス)
41 「新年おめでとう」(一九〇四年、ドイツ)



THEATER-
BAZAR
1903

BERN, den

TYP. A. BENTEL, BERN, 458

R.M.